

憐れみのチャプレット

煉獄カンパネラ

あどあ

Da' pace al mio povero animo!

神に呪われた少年と、神に挑む僕の物語。

※ この作品には、ファンタジー設定・年齢層製作・原作程度のグロ描写・モブ描写・R18性描写が含まれます。 ※

第一話

レオ六歳

この世界に生まれた僕らは、こう習つ。

『神は偉大である。』

罪人に、薔薇と林檎を与えられた。

罪人は、薔薇によつて愛を知り、林檎によつて生かされるのである。』

善良な民には、永遠の命が与えられ。死ぬことはない。血を流すことも。

だから、この世界では、『紅・赤』は呪われた色。

神に呪われている者には、死の呪いがかけられている。

『永遠に生きられず可哀想』

賢明な民は、呪いには近つかない。

神は戯れに人を選び、暇潰しに呪いをかけているのかもしれないが。

僕ははつきりと憎んでいる。神を、ただ一人憎んでいる。

どうして僕を、こんな世界に生んだんだ。どうして世界を、こんなに醜くしたんだ。

祝福された者たちは、そりやあ当然、神に感謝しているだろうさ。けれど。

僕は神を憎んでる。いつか僕は、この手で神を殺すだろう。

この世界が生まれた時、神は、人々にいくつかのものを与えた。神を崇めるための、絢爛豪華な教会。

穢れた血を流さず乳が絞れる、白黒のウシ。穢れた血を流さず贅沢な食材を探し出す鼻を持つ、ピンク色のブタ。穢れた血を流さず、毎朝卵を産み続ける、オレンジ色の立派なトサカを持つニワトリ。時間によつて輝く色の違う太陽は、その恵みで黄金の麦の実りを約束する。黄緑色の房のブドウは、透明なほどに澄んだワインとなり、人々の渇きを潤す。

信仰篤い者を中心に住まわせる、くそつたれなこの、箱庭の楽園。教会近くにどれだけ住むかで、神への信心の深さをはかられる世界。教会を中心に立派な家が建ち並ぶ。街から離れ、村ともなれば、暮らしは裕福なものとはいえない。

生まれた家が、教会からどれだけ近いか遠いかで、将来就ける職業の幅が大きく変わる、格差社会。

こんな世界に生まれておいて、まともに清く正しくなんて、馬鹿げている。

いつか死に逝く定めだと知って尚、誰かに愛されたいなど、誰が、どの面下げてのたまうのか。

多くの人々は永遠を生き、それこそ『永遠の愛』を誓いあうというのに。

呪われたこの身では、愛したいと願うことが赦されない。

僕らは、この世界において、生まれながらに『罪のない、咎人』

なのだ。

「ここは、神に祝福された者が、永遠の生を送るために用意された、二度とは出られない牢獄。

呪いを抱いて生まれた徒刑囚たちは、不意に訪れる死の接吻から、逃れる術を持たない……」

■ □ ■ □

宗教画つてのは、けつこー残酷だ。

神さまつてやつが残酷そのものだから、しょうがないのかもしれない。

そう広くもない美術館。客もまばら。

片隅に飾られた、ひととき目を引く、残酷な一枚。

『聖女マルガレタの祈り』

久しぶりに見る彼女の顔には、苦悶の色が濃く見られた。

「おんなのひと、ないてるね」

舌つ足らずの幼い声が、不意に、足元から聞こえた。

気づけば、見ず知らずの小さな男の子が、僕のスーツの袖を一部、

掴んだ姿で、マルガレタを見上げていた。

こんな小さな子どもの目に。マルガレタは一体、どのように映るのだろうか？

そして、この子は。どんな心で、こんなにも残酷な宗教画を見上げているのだろうか？

「いたい、いたい、なの？」

間違はなく僕に質問していて、大きな瞳が、世の残忍さなど知らないみたいに輝いていた。

「——痛くないよ？」

男の子の隣りにしゃがみ、説明してあげる。

「彼女は、神さまに愛されているから。この拷問も、苦痛ではないんだ。痛みは、悦びなんだよ。わかる？」

男の子は、僕の言葉の意味がわからないと、素直に首を傾げてみせた。

マルガレタの背後には、ヒゲをたずさえた男が、木の棒を振り上げた姿で描かれている。今まさにマルガレタは、この男によって打ち据えられている。彼女の背中には、青いアザがいくつも残されている。

それでも彼女は拷問に屈しない。ニセモノの神を信じる男の暴力に、真の神を崇拝する彼女は、いたづられないのだ。

「ママにほっぺたぶたれたり、パパにお尻ぶたれたり、しない？」

「レオがわるいからだから？」

ふむ、この子は、レオというのか。

「レオは、悪くなんかないよ。愛されてるだけ」

「あい？」

そう、暴力とは、愛情の裏返しだ。神も、マルガレタを愛しているから、彼女に苦難を与える。そうして、自分に救いを求めさせ、永遠の忠誠を誓わせ、神はマルガレタを手中におさめるのだ。

「レオは、ママやパパは好き？」

「すき！」

「そう、なら。将来は、痛みを甘受できる、いい子になるよ」

頭を撫でると、にこおと、レオが嬉しそうに笑う。

可愛い子だな。

きつと、泣き叫ぶ姿は、もつと愛らしいことだろう。「こめんなさい」と必死に繰り返しながら怯える様など、ゾクゾクものだろう。

「レオは、いくつ？」

「いち、にい……んーつとねえ、ろくつ！」

「そっか、六歳か」

六歳の子って、こんなに幼い感じだったっけ？ あまり子どもとは縁がない暮らしをしているからわからないが、K、Kの息子が六歳だった時より、なんだか幼稚に見える。

「にいには？」

「いに？」……あ、おにいさんは？ つてことか。

「さんじゅうだよ」

おもわずサバを読んだ。本当は三十五だけど、これくらいの子からしたら大差ないだろう。

数は、さんじゅうまではいえないのかな？ わからないけれど、僕はにつこり微笑んで、再びレオの頭を撫でる。

幼児をかどわかす趣味は、残念ながらナイはずなんだけど。ううん、気持ちちがわかってしまいそうで怖いなあ。

ほっそりとした、糸目の男の子。着ている洋服は、あんまり上等なものじゃない。シューズのカカトは擦り切れていて……保護者に、金銭的余裕がないのだろうか？ もつと手をかけてあげれば、

この子は、レオは、もつと可愛らしく輝くことだろう。

レオの家の近所に、引越してみようか。そうして、いい近所さんを演じて。レオに、プレゼント攻撃をしかけてみようか。その前に、両親を籠絡させなくてはいけないけれど、きつと大丈夫。

今の僕は、黒目に見えるコンタクトレンズを両目にしているし。左頬の傷も、丁寧なメイクで隠している。どこから見ても、神に祝福されている側の人間だ。

神に祝福されている者たちは、「我々の中に悪者はいない」と、のんびり考えている傾向がある。だから、ちよつとした手聞さえ惜しまなければ、僕だつて、そう見せることができるのだ。

ほんと、馬鹿な話だ。

手はじめに。迷子のレオを、両親へ返そう。きつと両親は僕を「親切な人」と認識するだろう。ファーストインパクトは、それでじゅうぶんだ。

「ママはどこかな？ 一緒に探してあげる」

手を差し出せば。小さなまみじの手が、素直に僕へと差し出された。素直で、従順で、とても可愛らしい子だ。

けれど、レオの頭は、力なく左右に振られる。

「ママ、ないない」

「パパは？」

ふるふるふる。やはり頭を振られる。

「レオがわるいからだから。しんじやった」

この世界において。死ぬ、というのは。………可哀想に。レオの両親は、呪われていたのか。

「ここへは、誰ときたの？」

たずねれば、レオの顔が曇った。それから、今にも泣きそうな顔をして、喉から、弱々しい声を上げる。

「にいに、たすけ……」

「レオナルド！ ここにいたのか、ずいぶん探したんだぞ」

びくつと、恐怖で委縮するみたいに、レオの身体が飛び跳ねる。
「ぐずぐずするな。さあ帰るぞ」

たとえてみるならば、今のレオは、恐怖に顔を歪めるマルガレタよりも強張った表情をしていた。痛みを流し、くちびるを噛みしめるマルガレタのように青ざめていた。

無防備に。僕へと差し伸べられた手は。強く、僕の手を握り。恐怖のためか、震えていた。

僕は、怪訝に思い、眉をひそめる。

「失礼、あなたは？」

「私はこの子の後見人ですよ。そういうアンタこそなに」

レオの後見人だという、四十すぎだろう男が、乱暴にレオの、あいている、反対側の手を掴む。

「やあ！ にいに、にいに！」

「どうしたんだい、ききわけがないな、レオナルド。そんなんじや、帰ったらお仕置きをしなくちゃならない。鞭打ちか、それとも……」

「！……ごめんなさい、ハンスおじさん……」

「あの。本当に彼のご身内の方ですか？ 彼、とても嫌がつてるように見える。とても懐いているように……」

僕に救いを求めるような、レオの瞳は。やっぱり、細い糸のよう

だったけれど、その目尻には、はつきりと涙が浮かんでいた。

しかも、なんていった？ この男、レオに、鞭打ちをする、だって？

この世界は、比較的、温和だ。暴力的なことは、神の名のもと、禁止されている。だと、いうのに。鞭打ちだとは？

「この子の家族はね。呪われていたらしくて、先月死んだばかりでね。だから、ウチにきたのも最近なんですよ。ロクな家庭で育って

なかったみたいで、わがまま癖が抜けないんで困ってるんですよ、こつちも。でも、こうして叩けば、ほら、大人しくなる」

いうなり、男がレオの、白い可愛らしい頬を引つ叩く。レオは、その力に押され、地面に倒れこんだ。

「やめてください！ 小さな子に、なんてひどいことを……！」

この男は、自分がなにをしているのか、わかっているのか？ 暴力だぞ？ この世界では、暴力行為は禁止されているんだぞ？ た

とえそれが我が子であろうと。子が、暴力だと感じれば。それは立派に犯罪なんだぞ！

「かまわないんですよ。こいつだつてね、きつと、呪われてるんだろ。うから。育ててやつても、いずれ死ぬんですよ。馬鹿らしい。死ぬとわかつてるガキを育てるなんて、金と時間をドブに捨てるのと同じだ。ねえ、あなたもそう思うでしょう？」

張り倒されたレオが、よろよろと立ち上がる。必要以上に、泣き叫ぶのではなく、そんなことをしたら、もつとひどい仕打ちを受けると、幼いのに、もう、理解してしまっているんだ。

この子も、きつと。幼い日の僕と同じで。悲惨な毎日を通して

いるんだろう。この男の保護下で、理不尽な暴力に耐えるだけの日々を暮らしているのだろう。

呪われているとわかったら。この世界では、人権がないのと一緒だ。最低の扱いを受ける。

ある意味、家畜扱いされるんだ。もしくは、なんの捻りもない言葉だが、それこそ終身的な奴隷として使われる。

暴力は犯罪という文言も、呪われた存在には適用されない。先に述べた通り、神に呪われた者には、人権そのものがないのだから。

「さ、帰るぞレオナルド」

男が、レオの襟首を掴み上げ、無理やりに歩かせる。

「待ってください！……手に余っているとおっしゃるのなら。その子を僕に譲ってください。お望みの金額をお支払いします」

呪われていると判明したら、『それ』は売買してもいいことになっている。人身売買にすらあたらない。

すると、目の前の小太りの男は、にやついた、嫌な笑みを浮かべた。

「……いやあ、そうはいわれなくてもね。こんな子でも、一応、身内ですから。息子の玩具程度には役立つんですよ。なにせ、壊れてもいい玩具なんて、滅多にありませんからね」

売るとなると、手放すのが惜しいか。欲を出しすぎだ。

「この子を、そんなに気に入ったなら。日曜の、デスパート地区で行われるチャリティーにでもいらしてください。そうすれば……まあ、詳しい説明は、その時にでも、おいおいと」

卑しい笑いを浮かべたかと思うと、男はレオの襟首を掴み、レオ

を引きずりながら美術館を出ていく。その頃には、なにもかも諦めたかのようなレオは、深くうつむいて、まるで壊れた玩具のようだった。

両親が、殺されたせいだ。呪われていると決めつけられた挙句、人間扱いされずに生きるレオの去りゆく姿は、ただもうそれだけで憐れだった。

思い出したくもない、己の過去を思い出しそうだ。僕も、無力な子どもであった時、実の両親から、親戚から、最低の扱いを受けた。僕たちの一族で、呪われていたのは、僕だけだったから。

——殺そう。あの男を殺して、レオを助け出すんだ。僕は、ゆつくりと尾行をはじめた。

この世界は残酷だから。完璧ではない。

抜け穴というか、落とし穴がある。

殺意を強く持って、相手を殺せば。殺人が叶う。永遠の命は絶たれるのだ。

なので、この世界に「事故死」は存在しない。人が死ぬ時には、必ず、呪いか殺意が存在するのである。

息を吹き返してほしくない者の口の中に、薔薇か、林檎を入れる。そうすれば、復活を阻止できる。

神に呪われた僕たちなんかは、薔薇を噛んでも、林檎を咀嚼しても、なんてことないが。永遠を約束されている者にとって、それは、毒なんだそう。

伝承が真実かなんて。僕はこの人生で、何度も人を殺してきたから、知っている。

レオが引きとられた家突きとめると、夜になるまで待った。その間、軽く情報を集める。

レオの両親は二年前、強盗に押し入った犯人によって殺害された。なにが「先月引きとったばかり」だ。あの男はこの二年、レオの後見人をやっている。

妹のミシエラは、今は、別れ別れに暮らしている。足と目が不自由とのこと。

ミシエラを引きとった家庭は、ありがたいことに人格者で、大切に育てられているとのこと。不幸中の幸いだ。

だが、レオを引きとったウチの評判は最悪だった。ある意味、家族揃って宗教家。この世界で「殺される」なんて、レオの両親はよっぽど罪深いんだ、その息子であるレオナルドも罪深いのだと。虐げながら暮らしている。まあ、あの様子を見る限りじや、この情報に間違いはないだろう。

教育なんて、与えるだけ無駄。死なない程度に食事を与えているだけ感謝してほしいくらいだ。などなど、おこった態度は目に余る。それでも、レオを知る近所のやつらみんな、口を揃えている。

『呪われてるなら、仕方ない』

『それがあの子の運命なら、しょうがないんじゃないかしら』
レオの貸し出しは、ここいらのチャイルド・マレスターの間では大変な人気らしい。なにせ、無理をしなくても、時に拷問めいたブレイを一方的に行っても、壊れても、息をしなくなっても、「いつ

かは死ぬから、仕方ない」で片づけられる存在だからだ。

子ども相手に性的な行為を虐げて楽しむなんて。そんなやつらを野放しにし、救い、守っているというのなら。神はよっぽどクレイジーだ。

レオの貸し出しは「チャリティー」なんだそう。性的な行為や、度の過ぎた拷問も「そのブレイは、いくらです」と料金を決め、募金してもらうのだとか。その募金で、恵まれない子どもたちを救うのだそう。

『呪われた存在が、善良な人々を救えるのだから。奉仕できるレオナルドだって喜んでいますよ』

あの男は、そういつていつも、金を受けとるんだそう。

レオを、性奴隷的に扱う男たちに、性的な玩具として扱う男たちに、斡旋するのが。「呪われた子どもが神に救われるための、奉仕活動」なんだそう。

ふさげるな、…… 反吐が出る。

——決めた。百万回でも刺し殺してやろう。

ドアを壊して、あの男の家に入った。証拠隠滅に、このあとウチを燃やしてしまうから、乱暴でかまわない。気を遣ってやる必要などどこにもない。

きつと、大火災になったら。レオくらい幼い子の骨も、一緒に燃えたことにされるだろう。僕は、それを狙っているから。このウチを大火で包む予定だ。

警察が調査した時に、荒らされていたとわかる方が、なにかと都合がいいだろう。

「きやああ！ 誰？ 警察を呼ぶわ……よ……」

僕が、乱暴にドアを蹴破り、玄関から侵入すると。一人の女がそれに気づき、悲鳴を上げようとした。このウチの中で、女は、あの男の女房しかない。顔も髪の色も一致している。――殺していい相手だ。

僕には、不思議な力がある。それこそ「普通の人間」にはない力だ。自由に氷を操れる。氷のない場所では、体内を循環する血液を、氷に作り替えることができた。

ギミックを仕込んだ革靴を強く踏み、呪われた赤い血を媒体に、床の上に氷を走らせる。

この女は、足元から凍らせるが、頭は凍らせずに残す。女は、引き撃った顔でこちらを睨みつけていたが、そんなのちつとも怖くはない。

氷で作ったハンマーを振り上げ、女の頭部を、潰すまで殴り続けてやる。頭蓋骨が陥没しても殴り続ければ、骨が割れ、髪の隙間からドロドロと、血が流れてきた。

「なにが、永遠を約束された、だ…… こうすりや、人間。誰だつて、血を流すじゃないか」

汚い血が飛んできた。それでもかまわず、頭部を潰す。骨を砕き、脳みそが飛び散るまで、徹底的に仕上げてやった。

ふう、気が済んだ。氷のハンマーを床に投げ捨て、右手で、女の顎を外す。白目をむいて死んだ女の顎は、簡単に外れた。

大きく開いた口の中に、小ぶりの林檎を押し込む。

「アーメン。神の国に、あなたの席がありますよう」

ちつとも思っていないことを、すらすら唱える。

さあ、次の仕事にとりかかろうか。息子がいるといっていた。なら、次は息子を殺し。最後、あの男を殺そう。

人を殺すだけの殺意なら、僕の中には満ちている。神を憎み続けた日から、殺意なら、僕の心に芽生え続けていた。

しかし。調査の結果、あの男の息子の年齢は、まだ十五歳とあつた。慈悲を与える隙はあるかもしれない。子どもは親を選べないというじゃないか。両親の影響で、少し道を踏み外している程度なら、殺すほどではないかもしれない。

でもな、あの男は、レオを、息子の玩具に与えているといっていた。同罪かな……？

「ごめんなさい！ いやだあ、やだああ……！」

幼い悲鳴が聞こえ、咄嗟に、そこにあったドアを押し開く。どうやら寝室らしく、セミダブルほどの大きさのベッドの上に、たるんだ腹のあの男と、その男にどこか似た少年が、全裸でいた。

それだけなら、なんだ？ と眉をしかめるだけが、二人の体の隙間から見える、小さな子どもの存在を、僕は、見逃さなかった。レオだ。レオも彼ら同様、なにも身にもとっていないようだった。

「ああ、これは……」

僕の殺意が、男たちの心臓に突き刺さる。

床を素早く走った氷は、男と、その息子の肢体に向かつて、鋭いナイフのように差し込む。何本も、何本も。その勢いと力に流され、男と、彼の息子の身体は、壁に刺された蛾の標本みたいになった。

氷柱といつていいものから、氷の針といつていいものまで。あり

とあらゆる肌の部分を刺した。それでも、顔や頭は無事に残す。ここまでしていて、甦られては。たまつたもんじゃない。

彼らが先ほどまでいた、ベッドの上には。裸のレオがいた。悪趣味な色の首輪を施され。腹と顔を、白濁の汁で穢されていた。それだけで、いいや、こんな姿を見なくても、あいつらになにをきされていたのかなんて明白だ。

なにか薬をうったのだろう。細い注射器が三本、カラの状態でシートの上に転がっている。レオの身体を見れば、幼い乳首が乳輪ごと、それぞれ赤く、不気味なほどに膨らんでいて。さらに、未成熟なペニスまでも腫れ上がっていた。

「可哀想に…… よく耐えたね、レオ」

性行だけではつかない、これは明らかに拷問の痕跡だというものも、多数、レオの小さな体に残っている。パンパンの水ぶくれ、青い痣、長さのある裂傷の跡。

「まるでマルガレタだね、きみは。どんな暴行を受けようと、必死に生きようと頑張るきみの姿は、決して、汚されてなんかいない。とても美しいよ、レオ」

「……に、に……う」

「目を閉じておいで、レオ。すぐにすむから」

氷のナイフで体のあちこちを刺し抜かれ、壁に張りついて動けない男たちは、口から血を流している。それでも、一撃死なんて優しい真似、してあげるわけにはいかない。

なぜなら世界は、残酷だからだ。

ここまでしておいて、死ねないのだ。こいつらは。神に祝福され

ているから。

僕からいわせれば、死への恐怖をじわじわ与えられて。痛みや苦しみを長く味わせることができるので、とってもありがたいシステムだけだね？

「レオが世話になった。これでたりのかい、後見人さん」

後見人ではなく、まずは、息子の口の中に、真つ赤な林檎を押し入れる。

この世界の住人なら、子どもだって知っている。林檎は、罪の果実だ。永遠を生きる者がこれを口にするのは、誰かに殺される時だけである。

「きみは、ずいぶん勉強熱心な子なんだろうね？ 自分より、ずいぶん小さいレオの体で、セックスの勉強でもしていたのかな？ お父上から、セックスの手ほどきを受けたんだろう？ 幼児のアナルを貫いて、泣かせて遊ぶのをね。世間じゃ、セックスとは呼ばないんだ。覚えておくといい。まあ、すぐ死ぬんだけど」

林檎を啜えたガキは、恐怖に震えているのか、体を無数に刺す水の痛みで震えているのか。いや、もしかしたら。自分の身に起きていることが理解できていないかもしれないな。こういう馬鹿を殺す時、話が通じないことが度々あるから。

「やめてくれ…… ガキなら！ そいつならやる、やるから！ 助けてくれ！」

ほら。父親が叫びだしたぞ？ なんて見苦しい。

レオだって。最初から、すべてを諦め。心を殺し、理不尽な痛みに耐えていたわけではないだろう。何度となく救いを求めただろう。

その声を無視し続けた男が、助けてくれ、だって？

虫唾が走る。

「命乞いする暇があるなら。魔王へのおべつかを考えた方がいいんじゃないか？」

「私たちは永遠を約束された存在だぞ！ それを手にかけてようなど…… 貴様は悪魔か！」

「残念だったな？ お前にかけられた、永遠の呪いは。解けるみたいだ」

革靴のつま先で、ぐりつと再び、床を強く踏む。

「待ってくれ、痛いんだ、なんだこれは！」

「そうか。お前たちは、痛みすら知らないのか。だから馬鹿なことをするんだな？ なにつて、その痛みは……お前の罪だろう？」

罪、ああ、そうだ。わかりきったことじゃないか。だと、いうのに。この期に及んで、男は唸つた。

「私は、神の家で、祝福を与えているんだ。罪などあるはずがない。罰当たりなのはお前の方だ！」

無数に刺されても、これだけしゃべれる、か…… 本当に、ぞつとする話だ。俺たちから見れば、化けものはお前たちの方だっていうのにな？

「死ぬわけがない！ そうだ、私たちが死ぬわけがない！」

「そうか、それは素晴らしい。刺され、貫かれ、焼かれるがいい。お前を包む炎の先には、赤い魔王が嗤っているだろうよ」

男の口の中にも、小さな赤い林檎を押し込む。口の中から零れ落ちてしまわないよう、氷柱で林檎ごと、喉へ突き刺した。

僕の殺意なら、人を殺せる。こいつらが息を吹き返すことはないだろう。

こうやって僕は、今まで、何人も殺してきた。そう、何人も、何人も……

今までは、自分が生きるためか、自分がよりよく生きるためか、そのためにだけに殺してきたけれど。

そうだな。誰かのために人を殺すのは、これがはじめてか。なんというか、気分がいいな。これでレオを救えるからだろう。

「レオ、もう目を開けて大丈夫だよ。さあいこう、ここを出るんだ」
ちいちゃな両手で、目を覆っていたレオが、恐る恐るといった様子で僕を見る。

きつと男の怒声は聞こえていた。理解できずとも、尋常じゃないものを感じたんだろう。怯えている。……僕のことまで、怖がつてしまっただろうか？

「レオ、ここにいなきや、だめなの」

「どうして？ きみは自由なんだよ」

「だって。ミシエラと、あえない」

よかつた。僕に対しての怯えはなさそうだ。でも、ここにいなきやいけないと、いう。どうしてだ？

……たぶん、だけど。この家族は、レオが逃げ出さないように、妹をダシに脅していたんだろう。逃げれば、妹には一度と会えなくなるぞ、とか、なんとか。本当に、見下げたやつらだ。殺して正解だった。

「レオ、にいに、だから。がまんするの。そしたら、ミシエラは、

しあわせだって」

「レオ……」

「ごめんなさい……！　がまんするからあ、いいこにするからあ、ミシエーラをなぐらないでえ……！」

目に涙を浮かべ、ボロボロと泣きはじめたレオは、恐怖に身体を震わせている。あの男が死ぬ前に吐いた、いろいろな怒声の意味がわからないから、きつと、混乱しているのだろう。

小さなその身体を抱き締めた。痛みに耐え、屈辱に耐え抜くにはあまりにも幼い。しかも、妹をダシに、脅されていたなんて。なんて可愛そうな子だ。

「大丈夫だよ、レオ。僕と一緒においで。ミシエーラにも云わせる。きみは、死ぬまで、僕のところにおいで。怖かっただろ、つらかっただろ。よく我慢したね、レオ。偉いぞ、きみは立派なお兄ちゃんだ」

「いに……」

泣きすぎて、しゃっくりを起す。レオは僕のシャツを両手で掴んで、額をくっつけ。こくと、うなずいてくれた。

ああ、見つけた、捕まえた。僕だけのマルガレタ！

レオのお尻の中に入れていた、ピンク色のローターを引き抜く。あの馬鹿どもは、三つも、こんなちいちゃな体に埋め込んでいた。

コードを引っ張ることで、ローターの位置がずれるから。気持ち

悪いんだろう。

「ひあつ……や、だ、やだよ……」

きつとあの男たちは、レオにローターを入れる時も、痛がる姿を面白がつて喜んでいたんだ。ベッドの周りにはローションらしきものも見当たらない。

我慢して、強張る体は、余計にローターが抜けづらい。そんな理屈が、六歳の子どもにわかるはずもない。

そうなる、僕としては。できるだけ短時間で苦しみを終わらせてあげたいから、ゆっくりなんかじゃ駄目なんだって結論に出る。

一瞬で終わる方が、レオも、ラクだろう。一つ一つを、一気に引っ張った。

何度も酷使され、淵が真っ赤に、ぷっくりと腫れたお尻の中から、ローターが出てくる。中から肉を押し広げ、ひとつふたつ、みつ

つ。これを引き抜いたあと、この、ぶくりとした穴の中に、男の欲望を差し入れ、むちやくちに突き動かすのは。そりやあさぞかし気持ちいいだろう。チャリティーで購入したやつらも、それ以外の夜に酷使していたあの親しも。そりや、夢のような思いをしたに違いない。

痛みからか、強すぎる快感からか。レオは、おしっこをしてしまつて。震えながら、やつぱり「ごめんなさい」を口にした。きつと、ここでの生活は。「ごめんなさい」が染みつくような生活だったんだらうな。

シートで身体を拭いてあげる。注射をうたれたんだらう乳首と、おちんちんのあたりを拭いた時には、レオが悲鳴を上げた。感度を

増す藥だつたのだからかと推測した。強力すぎる快感は、痛みに似ている。きっと幼いレオには、まだ、その違いが理解できていないんだ。

「レオ、お洋服を着たら、玄関の前で待つていて。外に出ちゃ駄目だよ、僕を待つて、ウチの中にくれ。一人でお着換えできるね？」

顔を覗き込めば、レオはうんとうなずいて、裸足のままタタタと走った。

僕は、最後に殺した男と、その息子の足元に、シーツと毛布を丸めて用意する。燃えやすいものを、死体の側に集めた。リビングの女の死体も、ここへ運んだ。

遺体とは、薪木である、篝火である。お前たちが敬愛する神がおわす天の国にまで、お前たちの燃えた黒煙が届くようにしてやるから、安心して死んでいる。胸糞悪いから復活するな。

「いにに」

「どうした、レオ」

彼に死体を見せないよう、ドアを閉めた。

「おっぱいとおちんちん、いたい。おようふく」

大きく腫れて、赤く膨らんでいる。快感を拾いやすくされている。しかしレオには、その快感の意味がわからない。つまりは、痛みにしか感じられないのだ。可哀想に。

いつもの洋服では体にきつちりすぎて、擦れて、ひどく痛むのだろう。レオの洋服がしまつてある場所を見れば、驚くほど洋服の枚数が少ない。着るものに、お金をかけてもらえなかったことが簡単

にわかる。

それでも、引き出しを開けていけば。一人息子の幼少時代の服をしまつていなのを見つけた。かなりサイズの大きい、だぼつとしたTシャツを渡せば、レオはそれに頭を通した。足首まで隠れそうだったので、下着やズボンは諦めてもらった。どうしても下半身を押さえつけ、刺激してしまうからはかない方がいいだろう。隠れるから大丈夫だ。

「大事なものがあつたら、今の内に玄関の前に持つてきて。もうここには二度と帰らないよ」

そういつて、僕はいつたん、車庫に向かう。灯油の入ったポリ容器を二つ発見したから、寝室へと運び込んだ。寝室に集めた死体、それを中心に、家中に灯油をまきはじめる。

火をくれば、一瞬で燃え上がった。

さて、レオは大丈夫か？ 玄関へと向かう。レオは、黄色いカメラを手にしてた。持つているのはそれだけだ。

「他はいいの？」

こくんとうなずかれたので、ヒョイとレオを抱きかかえ、速足でここから立ち去る。近隣住人が火事に気付く頃には、レオは自由の身だ。

抱きかかえると、どうしても、レオの目は背後に向けられる。だから。レオは黙つて、燃えるウチを見ていたはず。なにを思つて見ていたんだろう。わからない。

「レオ、これから病院へ直行するよ？ お医者さんに診てもらおうね？」

この二年、どんな仕打ちに耐えてきたかわからない、傷だらけの身体。今も、なんの葉がレオの体内を駆け巡っているか、わからない。信頼できる医師に診せる必要があった。

愛情もかけずに、レオを酷使した家族が、レオの体調を気づかづけてたはずもないだろう。

それに、いくら僕が「にいに」と呼ばれていても、いきなり僕と二人きりの生活環境に入ったんじゃ、レオが安心できない。

レオには、安心と、安全と、安静を知ってもらいたい。

そうして、できれば、妹のために、兄であるレオが犠牲になっていいというわけではないことも、僕の手段で、知ってほしいんだ。

■ □ ■ □

にいにていうのは、やさしくて、つよくて、かつこいい、せいぎのひとのことをいいます。

ニンジンをつたべられるひとのことをいいます。コケてもなかなかひとのことをいいます。だからぼくはニンジンをつたべません、コケてもビービーなきません。

にいには、おてつだいをします。みしええらのおきがえのおてつだいをします。みしええらがいないいたらギョウとしてあげます。いいこいいこしてあげます。

みしええらはあしがうごきません。くるまいすにのつてうごきません。くるまいすは、ひとのやさしさでうごきます。みしええらのそ

ばには、いつもやさしいひとがいてくれます。

だからぼくは、かみさまにかんしゃします。かみさまつてのは、みしええらをつたべたひとです。ぼくをにいにしてくれたえらいひとです。

「にいに、パパとママは？」

「みしええら、……きちやだめだ」

パパとママは、ベッドのなかで、まっかになっていました。

ぼくは、あかいろをしていました。あかいろは、つみぶかいひとのいろです。わるいことをしたひとにぬられるいろです。

パパとママは、ベッドのなかで、あかくなつて、へんになっていました。びじゅつかんでみた、しんでるひとのえ、みたいになってました。

かみさまにのろわれたひとは、あかくなります。シスターがいていました。

しんじやうというのは、とおいところへバイバイすることです。でも、パパとママはここにいます。けど、しんでいます。しんじやうつてことは、バイバイです。

「おきて……ねえ、おきて……」

よべば、かえつてきてくれるとおもいましたが、パパとママはかえつてきてくれません。

ここにいろのに、バイバイつて、どういふことなんだらう？

みしええらが、おなかすいたというので、れいぞうこからミルクをだしてあげました。

パパとママがいないときにお世話になる、おとなりのジェイミー

おばさんをよんで、きてもらいました。ジェイミーおばさんは「なんてこと！ 神さまに呪われていたなんて。おぞましい！」

さけんでいえをでていきました。けいさつのひとつをつれてきました。

パパとママは、けいさつのひとつにはこぼれて、……どこにいったか、わからなくなっていました。

ぼくとみしええらは、パパとママのしりあいつてひとのところへいきました。

ぼくはハンスおじさんのいえでくらすそうです。みしええらはべつのひとのおうちです。

みしええらは、いつばいなきました。ぼくもないてしまいました。

ハンスおじさんは、ぼくがいいこにしていたら、みしええらにあわせてくれるとやくそくしてくれました。

だからぼくは、いいこにして、みしええらにあつたとき、だいじようぶだよって、あたまをなでてあげようとおもいます。

ハンスおじさんや、しらないおとこのひとたちが、ぼくのおちんちんと、おしりをさわります。

「こわい、やめて！」

そういつたら、なぐられました。だけどぼくは、いやで、おじさんたちをけつたり、かんだりしました。そしたら、

「妹に会せてやらねえからな！」

「次に噛んだら、お前の妹を殴ってやる！」

つていわれました。それは、いやだなんておもいました。だから、たくさん、たくさん、がまんしました。

ふくれたおちんちんから、へんなしろいのがでてきて、それをなめたり、のんだりしろつていわれました。

おしりのへんなどこに、なんかかれて、いたくてなきました。

「いやだ、いやだあー！ たすけて、パパア、ママアー……！」

「お前が嫌なら、お前の妹にしてもらってもいいんだ。お前がしてくれるなら、妹は幸せに暮らせるんだ。どうする？」

ぼくがいやなことを、ミシエーラにされたくないの、ぼくにしてくださいっていいました。

おしりのへんなどこで、いたいことをいつばいされました。グチユグチユ、ズブズブ、パンパン、へんなおとがいつばいすると、いたくて、きもちわるくて、こわくて、ないてしまいます。

ぼくがいたいってないたら、いたくならないくすりをくれるつていわれました。ラムネとちがつてにがいです。それをいつばいのみます。

きもちよくなるおちゅうしやもします。ぼくはおちゅうしやがきらいです。そのおちゅうしやは、ぼくをへんにします。

こわいよ。おかしくなつてなりたくないよ。

だけど、みしええらはぼくより、なきむしたから。

きようは、えをみにいきました。ミシエーラとあえるひです。

かみさまや、えーゆーつてひとのえをみました。えーゆーつてひ

とは、こまってるひとをたすけてくれる、せいぎのひとです。
すつときれいな、えがありました。

『正しく導かれた男』

くろいかみをふりみだしながら、ひとをたすける、おとこのひと
のえです。あかいめをしているのがふしぎでした。

でも、きつと。かみさまにのろわれていても、ひとをたすけてい
いっていうことだとおもいました。

「にいにみたい」

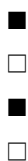
ミシエーラがわらいましたが、ぼくにはちつともにていません。
ミシエーラは目がみえませんが、ぼくのせつめいで、そうぞうしま
す。ぼくのせつめいがへただったのかもしれない。

だけど、ぼくとミシエーラだけにわかるあんがうができました。

『にいのえをみにいこう』

あかいめをした、あのおとこのひとは、ぼくとミシエーラのいに
になりました。

いつか、にいにがたすけにきてくれます。たくさんのひとをたす
ける、えーゆうだから、ぼくのとこにきてくれるのは、おそいかも
しれません。



「極端な栄養失調は、子どもの成長をとめてしまうんですよ。この
子はその、典型的なパターンでしょうね。打ち身と腫れが、そこか
しこに。炎症を起こしている傷も多数ありますし、火傷つていうか

焼き印めいたものも足の裏にありますよ。歩くだけで相当痛かった
でしょうね。男性器とお尻の状態もひどい。悲惨な『飼育』状態が
うかがえます。要・入院」

「お世話になります」

「心配だったら、泊まってってください。目が覚めた時、パニック
起こすかもしれないし。助けられたとはいえ、孤独感に押し潰され
たら意味ないでしょう。ぶつちやけ、いてくれた方が助かるってこ
とです」

僕が頼ったのは、ルシアナ・エステヴェス医師。世界一の名医と
いって差支えない。

ダブダブのTシャツから入院着に着替えたレオは、簡単な検査
（といっても、抜かりはない）を受けたあと、安定剤と栄養剤の点
滴をされ、個室で眠っている。

「『飼育者』は、彼の眼には気づいてなかったんでしょね。神々
の義眼を有している子だと知っていれば、もつと別の形の使われ方
をしていたかもしれない。まあでも、いくら美しい神々の義眼を
通して見つめても、彼の過ごした二年は、歪で醜悪なものだったで
しょうけど」

驚いたよね。ずっと糸目だったし。もしかしたら視力が悪いか、
目に怪我でもしているんじゃないかと思ったら。

宝石を隠し持っていた。

悪用されないようにと、幼いながらに、注意していたのかもしれ
ない。両親生存中に入手し、両親がきつく「人に見せてはいけな
い」と約束させたのかもしれない。

どちらにしても。レオに与えられた運命は残酷だ。

「あなたなら。外傷は全部、消せますよね？ 裂傷も、炎症も。それこそ、足の裏にある焼き印も」

「任せてください。この子の体力が戻り次第ですが」

「ありがとうございます。心強いです」

エステヴエス女史は口ごもることもなく、冷静に話をしてくれる。「医療技術で、外傷はすぐに消せますが、心の傷が癒えるまでには、相当の時間がかかります。あなたが彼の人生を引き受けることができないというのなら、しかるべき施設へ連絡します。命を背負うとは、言葉ほど軽いものではありません。答えを急がないでください」
いいにくいことも、彼女は、きちんと伝えてくれる。医師に怯まれちゃたまらない、その点から見ても、彼女はすぐれた医師だ。
彼女が、次の診察に向かうと。僕は、世話用の椅子に座った。
ゆっくり眠ればいい。怖いことも嫌なことも、全部が全部、もう終わったことだ。

レオの前髪をかきあげ、白い額に軽くくちづけた。

「きみが見る悪夢なら。これからすべて、一つ残らず。全力で僕が殺してあげるよ」

きみには無理でも、僕には人が殺せるから。だからどうか、安心してほしい。きみの人生は、僕が守ってあげる。

「あんたみたいなクレイジー・サイコ・ペド野郎に一目惚れされるなんて。可哀想な子ね」

クラスと、それからK・Kに。小さな子を育てることになったと連絡を入れた。

クラスには、当然レオが、神々の義眼保持者であることを説明。K、Kに連絡を直接入れたのは、このくらいの年齢の男の子が、なにを喜ぶかとか。いろいろこれから「教授願いたいからだ」。

それにしたつて。ペド・ホモ野郎つて、あんまりだなあ。僕、人殺しもしないけど、男とセックスしたことないし。少年愛に目覚めたことなんて……とか、K・Kは説明を求めないだろうなあ。
「まず、妹ちゃんを病室に呼んであげなさい。あんなのやり方じゃ妹ちゃんまで、この子が死んだと思ひ込んでるわよ」

「あ、そっか。そこまで考えてなかった」

「あんたは、ほんと。他人を慮る心ができてないのよ。でも、これからは、それじゃあいけないことぐらい、わかってるのよね？」

「もちろんだよ」

「どうだか。不安だけど、なんとかしていきましょ。とにかくまず妹ちゃんを病室に呼んで。二人にしてあげてる間に、下着とか服を買いにいきましょ。でも、ちっさいわあ、ほんと小さい。心配だわあ」

「心配しないでも。入院食は栄養のバランスがとれてるよ」

「あのねえ。食事つてのは、それだけのもんじゃないでしょう？」
病室にまで様子を見てくれたK・Kは、お昼寝中のレオを起ここしてしまっじゃないかってくらい勢いでしゃべっていたけど。レオは、よほど疲れていたんだろう、ぐっすり眠っている。

一児の母でもあるK・Kの目から見ても、レオはやはり、小さい

ようだった。「四歳くらいに見えるわ」といつていた。極端な栄養失調は、子どもの成長をとめるとエステヴェス女史もいつていた、そのせいだろう。僕のウチにきたら、おいしいものを腹いっぱい食べられる生活を用意してあげようと心に決めた。

ミシエーラに声をかけにいくのにも、K Kはつき添ってくれるといってくれた。なんでも「あんた一人が声かけたんじや、それはどうみても変質者の声かけよ」とのこと。そつだよなあ、ハタからは、そう見えちゃうよなあという自覚はあつたので、大人しく彼女の好意に甘えることにした。

少女一人に会っていくにも、僕らはまず、情報を集める。なぜなら僕らは、呪われた罪人なので。彼女の、この先の長い人生に、そういうたやつらと関わっているという汚点を、世間にわかるようにつけたんじや、申し訳ないから。それにより、レオの妹である。慎重にならざるをえない。

「彼女の後見人は、人格者だから。これから僕がレオを引きとりまして、正直に話せば、わかってくれるかもしれない」

「正攻法で引きとれたなら、できたかもしれないけど。あんた、三人殺して、あの子を強奪したのよ。向こうからすりや、殺人鬼に子どもをさらわれたようなものよ。わかってくれと説得するのに、時間がかかるわ。その前に、法的に没収されちゃうオチね」

「そうかあ…… それは困る」

「今は、妹ちゃんにだけ理解されることを考えなさい」
多くを望みすぎると、足元をすくわれる。そつだ、これは、間違つても失敗しなきゃいけないことだ。

レオの妹・ミシエーラは、五歳だが、とても利発らしい。いい後見人に引きとられ、きちんと教育を受けている。レオが、教育を奪われている分、彼女の方がおねえさんに見えることも多いという。昨夜の、一家虐殺・放火事件は、紙面を飾つたし、ニュースでも騒がれている。死亡者は四人。レオも、ちゃんと死亡者としてカウントされていた。

ウオッチ家からはじまつた強盗殺人の『呪い』が、生き残りの息子・レオを善意で引きとつたハンス家に『伝染』したのだと、人々は噂している。

呪いなんかに関わるから、永遠を奪われるのよ、と。

ミシエーラは、庭に出ていた。一人だ。燃えた家のある方角へと、顔を向けていた。膝の上には、一輪の深紅の薔薇。死者へたむけられる代表的な花だ。

彼女は、右手で薔薇を掴み、匂いを嗅ぐと。むしろと一気に、口の中に放り込んだ。しかし、すぐに嘔せ、吐き出す。

「きみは、永遠を約束されてるのか!」

「だつ、誰?」

「ちよつと、スカーフフェイス。驚かせるんじゃないわよ。ごめんなさいねえく。ほんとこいつ、無神経で」

呪われた僕らにとつて、薔薇はとても甘く、美味なものだ。しかし、永遠を約束された者には、ただ苦い毒。

両親を、殺害された子だから。周囲から「呪われた」と烙印を押された子だから。僕もまるまる、思い込んでいた。ミシエーラも呪われてるつて。でも違つた。

「もしかしたら。レオも、呪われてないのかもしれない」

「え！ おにいちちゃん、おにいちちゃんを知ってるんですか？」

車椅子の上から、彼女は必死に手を伸ばした。死んだとされる兄の名前を呟いた男へ向かって、声を頼りに、必死に。

「きみのいにいなら。僕のところにいる。安心して。生きてる。今は、病院で治療を受けているよ」

「ちよ、ちよっと、スカーフエイス」

利発といえど、彼女が、どんな子か。たしかめていない。彼女にレオの安否を知らせ、それが彼女の後見人に筒抜けになれば、騒がれる。だから、慎重になるべきだ。

でも、僕にはわかった。彼女なら大丈夫だ。

「ワケあって、僕が保護している。誰にも知られたくないんだ。だから。誰にも口外しないと約束してくれないか？ 彼にきみを会わせたい」

ミシエーラは、やはり敏い。しゃべり方も幼いレオと比べれば、しつかりとしていて。

「会わせてください。世界に二人きりの兄妹なんです」

「ミシエーラ！」

「おにいちちゃん！」

レオの顔色が、パツと明るくなる。限られた時間しか会えない、離れ離れの兄妹の再会だ。嬉しいに決まっている。

幼い兄妹は、互いの身体を大切に抱き締めあった。レオの笑顔を

見たことがなかったK。Kは、涙ぐんでるようだった。

会話は、妹のほうが達者だ。レオは、「しんばいかけてごめんね」と謝ったり、「ごほんおいしい」と、自分に駆使できつつ限りの言語で、自分の無事を妹に説明していた。

「あのな、ミシエーラ。こんどからな、あいたいときに、あえるんだ。いにいが、あわせてくれるって」

「いにいが？」

「うん。これからぼくは、ハンスおじさんじゃなくて、いにいのおうちにすむんだよ」

「いにいのおうちは、クリスマスにはサンタさんがくるの？」

ミシエーラにたずねられ。一瞬、ビククリしたが。「ああ」とうなずく。それからこう、つけ加えた。

「いにいのウチには、サンタさんがくるし。誕生日にはごちそうがあるよ。ミシエーラも、いつだって遊びにきていいんだ」

「それは素敵ね。おにいちちゃん、本当に、絵の中から、いにいが出てきたわ」

「絵？」

「いにいの絵よ」

ミシエーラが教えてくれた。

美術館に飾られた、男の絵。タイトルは『正しく導かれた男』……

作者不明。この兄妹にとって、それは英雄を意味する男の絵らしい。

そうか、レオの口から出る「いにい」という言葉には、そんな意味がこめられていたのか。

僕は、英雄なんかじゃないんだけどな。ただの人殺しだ。

それでも、レオの魂の渴きを潤すことができるなら。この手を赤く、紅く、染め続けよう。

「ミシエーラ、レオの世話を頼めるかい？ 僕たち、買ひものにいってくるから。帰りに、アイスクリームとか、ケーキとか買ってくるよ」

「ふふ、お兄ちゃん。アイスに、ケーキだつて」

表情豊かに笑う妹を見て、レオもすっかりリラックスした顔を見せる。

ああ、やつぱり、生きる理由が明白であるということは素晴らしいな。きつとレオの具合も、早くよくなるだろう。

あまり一気に、たくさんの相手と引きあわすと、レオが疲れてしまふ。だから、レオが、僕との新しい生活に慣れてくれるまで、家政婦の数は一人に絞ることにした。子どもを産み育てた経験者というのは、やはり頼りになる。

「ついたよ、レオ。ここが、きみの新しいウチだ」

一週間の入院生活で、レオの身体からは外傷の痕跡が消えた。足の裏につけられた焼き印も消され、腫れも引き、陰惨な拷問を思い出させるものはない。

この一週間で、レオは僕によく懐いてくれた。「にいに」という認識を持つてくれているから、怖がらせることはなく。わりとすんなり、僕という時間を受け入れてくれた。

なにも痛くない、無理をさせられない暮らしを、少しずつ思い出

しているようだ。両親を失う前、レオは普通の家庭で、ごくく平和に生きていたはず。それを思い出せるというのは、とても幸せなことに思えた。

レオに笑顔が増えてきた。不思議なんだけど、レオが笑うと、僕も笑顔になってしまふ。これが幸せってやつなのかなあ？

三日間、ミシエーラは、レオの見舞いにくてくれた。育ての親には内緒、その約束を守るため、本当は毎日だつて看病にきたいのをぐつとこらえてくれた。友だちと遊びにいくといつても、彼女は不自由な車椅子生活を強いられているから、後見人に嘘がバレるような長時間の居所不明は、命とりと理解したのだから。

『あんな元気に、楽しそうに笑うお兄ちゃん、久しぶりだから。にいと一緒で暮らせば、お兄ちゃんは幸せになるって、私、信じてる』

妹君の期待に応えるためにも、頑張らなくちゃな。

「ふおおお！ いいにいい！」

「お、うまそうな匂いだな。手を洗ったら、すぐ御飯にしような？」
今日は、レオに、我が家に慣れてもらうことに集中してもらうため。家政婦には、先に帰ってもらっている。帰宅時間は伝えてあり、ギリギリに料理を仕上げてくれと頼んでいた。よかった、湯気が立っている。

上手におててを洗ったのを確認してから、ふわふわのハンドタオルで丁寧に手を拭いてあげた。

「これが、レオの椅子だよ。ここでお飯を食べるんだ。あとで、テレビのお部屋と、レオの部屋を案内するね？」

「ちそうだねー にいに、おたんじょうび？」

「違っけど。そうだな、今日は、僕とレオが家族になる、記念日だよ」

「きねんび？」

「大切な日って意味だよ」

レオは、きつと意味はわかっていないんだろうけど。それでも、嬉しそうに笑ってくれた。

この一週間、病院食だったから。匂いの強い、できたてであたたかい、味の濃い食事をとっていない。それでもレオは「おいしいね」と病院食を残さず食べていたが。

肉、肉、そして肉！ といったテーブルを確認して、レオのおなかがグウと鳴った。やつぱり男の子だなあ。食事を開始する。

「！ にいに、きねんび、おいしいね！」

レオの言葉に、おもわず頬の筋肉が緩む。

こんなにおいしいそうに食べてくれるなら。毎日が記念日でも、かまわないな。

レオはお風呂を嫌がった。どうしてだろう？ それまでずっといい子にしていたのに。体を洗うのも、頭を洗うのも、一人じやまだ無理だろうから「一緒に入ろうね」っていったのに。レオは、なんだかとても悲しそうな目をして、「……や。はいんない」といった。テレビをじっと見ていたから、もつと見ていたのかなと思って。昨日、病院で看護師さんにお風呂に入れてもらってたし。まあいい

か、初日に、嫌がることを無理強いするのな……と、甘やかすことにした。

「いい子は寝る時間だよ。さあレオ、ベッドにいこうね？」

いやいや、とレオは頭を左右に振り。テレビを見続けた。テレビ大好きか。

「駄目だよ。もう二十一時じゃないか。ベッドで御本を読んであげるから。もう寝よう？」

「にいに、……」

「どうしたの、レオ？」

様子をうかがう。

新しい環境の中で、興奮して、なかなか睡魔がこないのもわかる。だけど、疲れているはずだ。

僕んちのベッドはふかふかだ。病院のベッドとは比べものにならない。なにせ僕の趣味は「快眠」だから。枕もいいのを使ってる。手を出せば、レオは、僕の手を握った。それでもなんだか、一気にシュンとした。まるで、自分が売られていくのを理解している仔牛のような雰囲気だ。え、なんで？ なんでそんな悲壮感漂わせてるの？

大人しく寝室へやってくる。なぜだかレオの足どりは重く、油のさし忘れたブリキ人形みたいになっていた。おかしいな？ 緊張しているようにも見える。どうしてだ？ ベッドで寝るだけだぞ？ 寝室には、絵本を用意していた。家政婦にいろいろ見繕ってもらったのだ。六歳ともなると、少し難しい本も読めるはずなんだけれど。きつとレオの学習能力は、両親を失った四歳から停止している

と見たからだ。

レオを先にベッドの中に向かわせると、僕は絵本の棚に向かう。タイトルを見ても、ううん……知らないなあ。

この世界の絵本は、どれだけカラフルでも、差し色に赤がない。それがとても、歪んで見える。

薄い絵本の中から、一冊を抜きとった。まずは、短いお話を読み聞かせてみよう。とはいえ、絵本の読み聞かせなんて、したことがないぞ。レオが喜んでくれるといいんだが……

「これ、レオ、しってるよー」

僕がベッドに持ち込んだ絵本を見ると、それまでずっといいしよげていたレオの顔色が、パァッと明るくなった。

「ほんとう？ すごいなレオ。僕は、知らないなあ」

「にいによんであげる！」

どこか緊張していたレオだが、僕が絵本を手渡すと、ベッドのシートに本を預け、うつむけにゴロンした。

「えつとねー ちいさなウサギさんとおおきなウサギさんが、いました。にひきは、あるひ、おほしさまが、そらをかけるのをみました」

「すごいな、レオ。とても上手だ」

褒めてあげると、レオは得意顔をしてみせる。家族揃って暮らしている時、妹相手に、読んであげていたのかもしれないな。

「ながれぼしに、おねがいをすると、コンペイトウのあめがふりました」

一生懸命、僕に絵本を呼んでくれる、レオの横顔を見守る。間違

わないように、一言一言、大事に読んでいる。

「そして、おおきな……ウサギ、は……」

こつくりこつくり、絵本を読みながら、レオが船を漕ぎはじめた。目をこしこしながら、それでも頑張って絵本の言葉を口にする。

「ちい、ちやな、ウサギ……と……」

ガクン！ と、頭が絵本の上に落ちる。それから、レオの、規則正しい寝息が聞こえはじめた。

そろそろお……と、レオのほっぺの下から、絵本を抜き出し。枕の下にしまいこむ。

叫び出しそうになるのを、なんとかこらえる。が、耐えきれず、両手で顔を覆い隠す。

ああああああ！ 冷静に考えて天使！ 謙虚にいつて「可愛らしい」の伝道師！ なんんん！ 変な声出るううう！

そうか、僕はこれから、こんなにも愛らしい、いとおしい存在と暮らしはじめるのか。それは、なんていうか、……幸せだな。

幸せ、かあ…… それはいつも、他人ごとだった。僕を通り過ぎる、風のようなものだった。

僕の目を見た瞬間、父も、僕を生んだばかりの母でさえ、「こんな子を授かるんじゃないか」と後悔したそうだ。僕の目は、呪いの色をしていたから。

そのせいで、わりと孤独に生きてきた。それでも僕が、最後の一线、こらえたのは、K、Kや、クラスたちと出会えたから。

僕との出会いが、レオにとって、そうだった、よいものでありますように。そう祈りながら、僕も、遅れて眠りについた。

夢の中で、小さなウサギと、大きなウサギが跳ねていた。流れ星にお願いして、金平糖の雨を降らしてもらっていた。金平糖は、流れ星の欠片で、ウサギたちは空を飛んだ。

気づけば、大きなウサギは、僕だった。僕は夜空を飛んでいる。小さなウサギの手を、ギュッと握って一緒に飛んだ。月に向かって飛んでいた。

空を飛ぶのは気持ちがよくて、……気持ちがよくて？ ううん？ これ、気持ちがよくないかな？

「なにっ？ あれ、レオどこにいっ……レオっ？ なにやってんの！」

かけ布団をめくり上げてみれば。レオが、僕の股間の上に顔を埋めていた。

僕のパジャマと下着をずりおろし、僕の、朝勃ちしたちんこを掴み、しゃぶりついている。

小さすぎて、狭い口の中。僕の、勃起したちんこがおさめられていた。ヒクヒクと快感を求める浅ましい欲が、レオのちいちゃな舌で、赤く拙い舌先で、遊ぶようにくすぐられている。

「やめなさい、レオ、やめっ……！」

必死に引き離そうとするが、レオが、しゃぶって離さない。ああ、そんないい訳を用意して、僕は、実は本気で、引きはがそうとしていないんじゃないか？

だって。これは、だって。ヘタクソなのに、気持ちがいい。

子どもの体温は、高いから。口の中も、余計に熱いのかもれない。それに、レオの口はちいちゃい。つまり、口内が狭い。僕のちんこの、啜えられるだけの部分が、全部、レオの口の中のぬるぬるとした、いやらしいあたたかさに包まれている。

駄目だ、こんなの。我慢できなくなる。ビュルと、白濁の汁を吐き出して。気持ちよくなってしまう。なる。

それでも僕は、なけなしの理性を發揮する。僕の汚らしい欲望で、レオの口の中や、顔を、汚してはならない。ぐっぐぐとこらえて、レオの顔を無理やり引かせる。

「レオ、なんでこんなことするの！」

心臓が、ドキドキしすぎて。ビクビクしすぎて。怒ってるみたいな声を出してしまった。

そのせいもあるんだろう。レオが、おどおどビクビクしながら、泣き出すのを我慢しながら答える。

「だって。おちんちんが、こうなったら。こうしないと、おウチ、おいだすって」

「誰が？ ハンスがか？」

コクンと、レオがうなずく。

「ほかの、おじさんたちも。やさしくしてくれたら、やさしさのプレゼントを、しなくちゃ、いけないんだよって。にいに、やさしくしてくれたから、ぼく、ぼく……っ！」

……そうだ。レオが暮らした二年間は、レオの記憶に、暗い影を残している。

無理やりレオを飼いならす男から、レオをレンタルし。甘く優しく

いことをいったり、やったりしたあとで。見返りにレオを求めた男は、決して少なくはないのだろう。

僕が、そういうやつらと違う、絶対違う、断じて違う！ と。レオは、なにをもって判断すればいいんだ？

「ごめんね、ごめんねレオ。きみはもう、こんなことしなくていいんだよ。こんなことしないで、ずっとここにいていいんだよ。こんなこと、もう、しちゃ駄目だよ。僕だけじゃない、誰にだってしちゃ駄目だよ。レオがやりたくないことは、誰に命令されたって、もう、しなくていいんだ」

「でも、……にいに。レオ、わるいけども、にいにいつしよにいられるの？」

「レオ、きみは悪い子なんかじゃない。ずっと一緒にいられるよ。むしろ、悪いのは僕の方だ。朝勃ちなんかしない、もう二度と、金輪際！ 朝勃ちなんかしないから！」

ちいちゃな口を濡らす汚れを、指で拭ってから、強く胸にレオを抱き締める。

ああ、そうか。昨夜レオが、お風呂に入りがらなかったのも、寝たくないといったのも。「風呂や寝室では、こういうことをさせられる」と、レオはもう、忘れられないほどに覚えてしまっているからだ。そんなことにも気づいてあげられなかったなんて。

レオの生きる世界を、美しいものにするために。僕も頑張らないといけない。僕はきつと頑張れる。僕はレオの、にいになのだから。

……あああああ！ だからおさまらないかな、朝勃ち！ レオが怯えるなら、鎮まれよくつそお！